

子どもと保育の情景 (8)

遊びは不思議

戸田雅美

幼稚園の秋の一日、私は三歳児の保育室にいた。その日は、次々とトラブルが起こって、子どもが泣いていた。見ると、どのトラブルにもたつきが関係しているらしい。保育者が、子どもの訴えを聞いて、たつきを呼んできて話を聞いている場面が多かった。たつきは、保育者の話を聞きながら、「わかった」というようにうなずくこともあるのだが、興味を引くものがあると、そちらに気を取られて、話も耳に入らないように見える時もある。

たつきは、入園当初から、三歳児の中でも目立つ存在で、保育室に子どもたちが集まってきた時に一緒にいることはほとんどなかった。そのような時には、担任は、四歳児や五歳児のクラスにたつきを探しに行くことになる。たつきは、おもしろいことが目に入ると、四歳児や

五歳児のクラスでも入って行き、自分より年長の子どもたちに、何となく受け入れられて過ごすことが多かったからである。

この日は、たまたま四、五歳児のクラスの遊びが、たつきにとっては、あまりおもしろいとは思えなかったのか、自分のクラスの子どもたちに興味が出てきたのか、朝からずっと、同じクラスの子どもたちの周りをうろろろしていた。おもしろそうだと思うと、いきなりまごとの場に入り込んで鍋で料理を始める。すると、「その鍋は私が使っていたのに……」となつみが泣きだし、一緒に遊んでいたあやが、担任に「たつき君が鍋を取ったの」と訴えるという具合だった。その後も、はるきとゆうだいの戦いごっこがおもしろいと思っただらしく、戦い

のふりをしている二人にとびかかってしまい、ゆうだいが転んで泣きだすというトラブルもあった。

朝からこんな状態だったためか、たつきは、おもしろいと思ったからかかわっていくというよりは、明らかに相手が嫌がると思われる様子で、材料を散らかしてみたり、使っているおもちゃを取ろうとしたりするようになってきてしまった。私は、朝から楽しそうにやってみては、結局トラブルになってしまったつきが気になっていたので、次第に、悪いとわかっているながら人の嫌がることを始めてしまっているたつきの気持ちがかわるきつかけはないかと思っ見ていた。

たまたま、たつきは、通りがかりにウレタン積み木が遊びかけのまま二、三個出ているのに気がついた。ふと、積み木を持ち上げるとひよいひよいと積み上げた。どうやらその積み木は誰にも使われていなかったらしく、そんなたつきの行動からトラブルになることはなかった。最初は、ほんの偶然に、遊びかけの雰囲気惹かれて積み木を積んだようだったが、積んでみる

と、何か感じるところがあったのか、周りを見回すと、私と目が合う。トラブル続きで硬い感じだった表情が和らいでいる。私が「高くなってきたね」と言うのと、にこっと笑って、さっと積み木を取りに行く。さらに三個積むと、積み木はたつきの背丈よりも高くなった。

再び私を振り返ったたつきの顔は「高くなってきたよ」と言っているように見えたので、「わあ、高くなつたね」とその表情に応えると、さらに笑顔になって、積み木を取りに行き、また積む。こんなふうには積んでいる



と、かなり高くなってくる。すると、ついさつき、たつきが鍋を取ったと言って怒っていたなつみとあやが、ちようどままごとが、一段落したところだったらしく、たつきの積み木の塔が「おもしろそうだ」という様子でやって来て、「たつき君入れて」と礼儀正しい雰囲気と言う。たつきも「いいよ」と答え、二人に「積み木取ってきて」と言うと、なつみもあやもにこにこしながら、積み木を取ってきては、たつきに渡す。渡し終わると、たつきが積み上げるのを見守って、二人の積み木が両方ともうまく積めたのを確認すると、二人そろってまた積み木を取りに行く。たつきは、積める所まで高く積みたという目標を持ったらしく、表情も真剣そのものになってきていた。

私は、この二人が、たつきの言うままに積み木を運んでいても楽しそうだったので、ほっとする思いで見ている。自分たちも積み木を積みたいと言い出したら、きつとたつきは拒否するに違いないので、またトラブルになる可能性が高かったからである。子ども同士のトラブル

はある意味あることが当たり前で、避けるべきこととは限らないわけだが、この日は、朝からトラブル続きで、ぎくしゃくしていたたつきがやつと見つけた遊びが満足できずに、またトラブルになることは避けたかった。さらに、いつもはその時々「おもしろい」と感じたものにすぐに気持ちが移ってしまいがちなたつきが、珍しくじつくりと真剣に取り組んでいることを大事にしたいとも願っていた。もし、この二人が、「積みたい」「たつき君だけずるい」と言い出したならば、たつきが自分で納得するところまで積むことができるように、また、二人の気持ちも尊重できるようにと、私はあれこれ考えていた。さらに、できれば三人が一緒に遊んでいるというこの雰囲気も壊れないように、何かできることはないかと思いつながら、でも、どのようにしたらよいのか工夫が思い浮かばないまま身構えていたからである。

結局、三人はうまい具合に、手分けをしながら、どこかで「積み木を高く積む」という思いはゆるやかに共有しながら、積み続け、とうとうたつきが台に乗って積み

る最高の高さまで積み上がった。もう一つ乗せようとして頑張ったのだがどうしても乗らず、かえってぐらつきそうになることに気づくと、自分でここまでと納得できようだった。台から降りると、よりいっそうの高さに満足したのか、私を見てふっと表情を緩めた。私は、たつきたちと同じ視点から見たくて、たつきのそばでしゃがんでみた。「高いねえ」と言うと、たつきも「高いねえ」と答えた。なつみとあやも驚いたように見上げていた。

しばらくすると、たつきは担任を呼んできて見せ、主任の先生を引っ張ってきて見せ、とうとう幼稚園中の保育者の手を引いてきては「高いね、たつちゃんがやったの？ なつちゃんとあやちゃんも運んだんだ」などと言われて満足そうだった。その後片づけの時には、はじめは「壊したくない」と言っていたのだが、担任の言葉を受け入れ、自分から、一つひとつ丁寧に下ろしていきながら、片づけていった。なつみとあやも、たつきの下ろしていく積み木を、楽しそうに運んで行っては、きれい

にしまっていた。

幼児期には遊びが大切と言われる。一般的には、このことは、「のびのび」「元氣」という程度の意味で受け止められることが多い。しかし、ほんの偶然から始めた遊びが、遊んでいくうちに楽しくなり、自分なりに目的といえるものができ、それが「ここで限界、やれるところまでできた」というような「納得」を自分ですることができる。そのプロセスを誰かに共感してもらいたいと人に心が向き、その人たちの言葉に心を傾けて、それを自分なりに受け止めて動くことを始める。

たつきのような子どもたちの姿を見ることは、決して珍しいことではなく、遊ぶことができる場でありさえすれば、いつでも見ることができると、ごく当たり前のことである。「遊びは不思議」と思わざるを得ない。

そしてまた、遊びと子どものこのような関係を、子どももすぐそばにありながらも、大人たちがなかなか気づくことができないことにも「遊びは不思議」と思わずにはいられない。

(東京家政大学)